

政務活動調査報告書

調査日	平成29年4月20日（木）
視察場所	東京都豊島区
調査項目	NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークの取り組みについて
視察者名	畔柳敏彦 井手瀬絹子 畑尻宣長 野島さつき
区の概要	面積：13.01 km ² 人口：291,066人 人口密度：19,515.06人/km ² 世帯：151,720世帯 経常収支比率：78.8% 実質公債費率：▲0.9%

●設立の趣旨

豊島子ども WAKUWAKU ネットワークは地域の子どもの地域で見守り育てるために設立いたしました。相対的貧困率は悪化しつづけており、2014年の厚生労働省の発表によると、16.3%であることが明らかになりました。教育格差、貧困の連鎖が広がっている中で、生活保護を受けている、もしくは、年収が生活保護費とかわらないワーキングプアの家庭で育つ子どもが、6人に1人いる現状で、地域の子どもの、地域が見守り、学びや暮らしを有機的に支えるネットワークをつくり、子どもの未来を明るく変えていきたいと願っています。さまざまなカタチの居場所を通じて、信頼できるおとなや若者につながったとき、一人の子どもの人生が大きく変わる可能性があると感じ設立に至りました。

「地域を変える 子どもが変わる 未来を変える」



ロゴにまつわるお話

WAKUWAKUでは「おせっかい」を推奨しています。おせっかいをされた子はおとなになって、おせっかいを返すので「おせっかえる」です。デザインしてくれたのは、「要町あさやけ子ども食堂」に来ていた、当時小学生だった女の子。「おたまじゃくしが、まちでいっぱいおせっかいをやかれて大きくなっておっせっかえるになる」という思いのもと描いてくれました。

豊島子ども WAKUWAKU ネットワークの活動内容は、大きく3つあります。

- 1、 遊びサポート・・・・・・・・池袋本町プレーパーク
- 2、 学びサポート・・・・・・・・無料学習支援
- 3、 暮らしサポート・・・・・・・・子ども食堂
夜の児童館

1、遊びサポート

<池袋本町プレーパーク>

池袋本町プレーパークは遊具のない原っぱで、思いっきり外遊びが出来る場です。プレーパークは「冒険遊び場」とも呼ばれ、土・水・火・木など様々な要素がある空間です。ここでは子どもたちの好奇心や欲求を大切にし、やりたいことができる限り実現できるように運営しています。火を焚いたり、木に登ったり、穴をほったりどろんこ遊びなど、自然の中の素材や道具を使いながら、



子どもが「おもしろそう!」「やってみたい!」ことが実現できる場所です。ですので、何もせずぼーっとしていてもいいですし、一人のときでもここに来れば、一緒に遊ぶ仲間やプレーリーダーがいます。

プレーリーダーは、子どもの遊びを見守り、一緒に遊んだり、話し相手になったり、けがやトラブルに対応します。

プレーパークには禁止事項の看板は立っていません。禁止事項ばかりだと楽しい遊びができないからです。かわりに「自分の責任で自由に遊ぶ」というモットーが掲げられています。

自由な遊びを通してありのままの自分を出せる場所にするには、単にスペースがあるだけではなく、約束せずに遊べる仲間がいること、そしてある程度大人が見守ることが大切ではないかと考えています。2004年当初は、JRの空き地が防災広場としてあったところを期間限定で使用させて頂いていました。現在は学校の跡地を利用させて頂いています。



2、学びサポート

<無料学習支援>

教育格差による貧困の連鎖をくいとめるために、無料学習支援を実施しています。家庭の状況に左右されることなく学びの場を保障します。

学習が遅れている子、勉強が苦手な子、ひとりで宿題ができない子など、地域の気になる子をどうぞ連れてきてください。丁寧に教えてくれるので勉強が楽しくなります。

単に学力向上を目指すのではなく、子どもとの関係づくりを大事にしています。進路や将来のことなど、困ったときに相談に乗ります。

子どもたちは家から遠い場所には通えないので、地域に無料学習支援の場を点在させることをめざしています。

外国籍の子どもへの日本語教室も始めています。



3 暮らしサポート

<子ども食堂>

・要町あさやけ子ども食堂

子どもにワイワイがやがや賑やかに食卓を囲んでもらいたい。

日頃忙しいお母さんに一食分でもゆっくりすごしてもらいたい。

そんな思いから 2013 年 3 月に子ども食堂をオープンしました。

東京池袋・要町にある店主「山田じいじ」の自宅兼パン屋を改装した一軒家の子ども食堂です。

☆食事について

基本的に生活クラブ（生協）の食材と昔ながらの製法で作られた調味料を使用し、また有機農家などから送っていただく余剰野菜も活用しながら、安心・安全な食事を提供しています。

また、食物アレルギーにも配慮した献立づくりを心掛けています。

☆遊び場について

店主の寝室以外はどこでも立ち入り自由です。

食事が終わった子どもたちは、階段を駆け上がって絵本やオモチャで溢れる 2 階のお部屋で遊びます。

押入れには秘密基地もあるんです！

☆お母さんに息抜きを

子どもに手がかり、自分の食事さえ落ち着いて食べる

余裕がない忙しいお母さんが、子どもを他の人に見てもらいながらゆっくりとご飯を食べ、同じように子育てを頑張っているお母さんたちと会話をすることで、息抜きが出来ればと思っています。

☆参加できる人

幼児から高校生までの子どもが参加できます。親子での参加もちろん OK！



※一人で参加される場合は、身の回りの事が自分で出来るお子様に限らせていただきます。

毎月、第1・第3水曜日の17:30～19:00にオープン。

参加費 子ども100円（同伴者300円）で

栄養バランスのよい夕食を食べられます。

子ども食堂は大勢のボランティアと全国からお送り頂く食材のご支援で成り立っています。子ども食堂の食事は大学生から80歳の方まで、大勢のボランティアで作っています。準備は15時くらいから始めます。そういった皆さまの応援が子ども食堂を続ける力になっています。

・池袋こども食堂：第1・第3木曜 17:30～20:00

参加費 300円

・椎名町こども食堂：第2・第4木曜 18:00～19:30

※宿題タイム 16:30～19:30

・ほんちょこ食堂：第2・第4火曜 17:30～19:00



<夜の児童館>

宿題をしたり、遊んだり、一緒に手づくりの夕食を食べて、家庭的な時間を提供します。大学生にボランティアで入ってもらい、楽しい夜のひとときを過ごします。

日時：毎火曜日 16:00～20:00

場所：金剛院こんごういん 蓮華堂れんげどう 2階 ※椎名町駅前

対象：地域の小中学生 5～10名

利用料：なし

ジャンル	名称・開催場所	開催曜日
プレパーク	池袋本町プレーパーク(池袋本町公園内)	【毎週】水～日曜(祝日)
無料学習支援	池袋WAKUWAKU勉強会(区民ひろば池袋集会室)	【毎週】火曜日
	クローバー(上池袋まちづくりセンター)	【毎週】水曜日
	クローバー朋有(区民ひろば朋有/ジャンプ東池袋)	【毎週】木曜日
子ども食堂	要町あさやけ子ども食堂(豊島区要町)	【毎月】第1・第3水曜日
	椎名町こども食堂(豊島区长崎)	【毎月】第2・第4木曜日
	池袋こども食堂(豊島区池袋)	【毎月】第1・第3木曜日
	ほんちょこ食堂(豊島区池袋本町)	【毎月】第2・第4火曜日
シングルマザーの交流会	ポコアポコ(がんばれ子ども村)	【毎月】不定期で日曜日

<所感>・・・畔柳敏彦

子供の相対的貧困率は1990年代半ば頃からおおむね上昇傾向にあり、平成24(2012)年には16.3%となっている。子供がいる現役世帯の相対的貧困率は15.1%であり、そのうち、大人が1人の世帯の相対的貧困率が54.6%と、大人が2人以上いる世帯に比べて非常に高い水準となっている

経済的理由により就学困難と認められ就学援助を受けている小学生・中学生は平成24



(2012)年には約155万人で、平成7(1995)年度の調査開始以降初めて減少したが、その主な原因は子供の数全体の減少によるものである。就学援助率は、この10年間で上昇を続けており、平成24(2012)年度には過去最高の15.64%となっている。

私たちは最近TV放映で話題になっている孤食で寂しく暮らす子どもたちが寄ってきて、家庭的な雰囲気の中で、手作りの食事を提供して元気に過ごす子どもの姿を時折、目にしていた。放送の中で子どもの一人が「家で食べる

よりおいしい。ここにいると楽しい」と発言を耳にして、なんで？と感じていた。その子たちは、母子家庭で、お母さんが生活のために昼夜を問わず働いているため、500円を母親から食事代としてもらい、コンビニでパンを買って食べたり、おにぎりで済ませたりして、家庭料理を経験したことが少ないようでありました。そんなさみしい心の子どもたちにボランティアで行っている「子ども食堂」は子どもたちにとって、とてもありがたく、かけがいのない癒しの空間を作られた子ども食堂はどのような経過で開催されたのか、岡崎市では2人ほどの方が、店舗などを借り、昨年夏休み期間を利用して開催されましたが、周知が悪いのかあまり集まらなかったという事実もあり、行政としてもかかわりが必要ではないかと子ども食堂の創設者であるNPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク栗林知絵子氏に直接お会いして無料学習塾の淵源を学ばせていただこうと思い今回の視察調査をさせていただきました。

栗林さんは2004年、豊島区にプレーパークがオープンした。準備会の時から参加していたいきさつもあり、池袋本町プレーパークの会代表になられていました。プレーパークはデンマークで始まった「冒険遊び場」づくり運動のことで、基本的には既存の遊具はおかず、手作りで、土、水、木、火など自然の素材が遊び道具となる。そこで子供たちは、異年齢で群れ遊び。失敗も含めてやってみたいことをとことんできる遊び場のことだそうです。このかかわりが、事の始まりとなるようです。ある日、プレーパークでKちゃんが「昨日から、ご飯食べてないの」「私、20円の駄菓子食べたよ」家族で独身用のアパートに住んでいること、「引っ越してくる前は、車の中で暮らしていた」こと、お母さんのことでからかわれても、いつもニコニコ笑っている姿を見て、栗林さんは「いやなことされたら、イヤだ！と言っていいんだよ。怒ってもいいんだよ」としか伝えることしかできなかったことが悔いに残るといわれていました。Kさんはその後、引っ越していかれたということです。

また、2008年「年越し派遣村」の映像は衝撃を覚え、2010年年越し派遣村の村長の湯浅氏

の勉強会に通い「もしかしたら、まちの子どもの暮らしと、TVの向こうの問題はつながっているのかも」と思い、勉強会に行けばKちゃんが笑顔で暮らせる方法が見つかるかな？」お思い立ったそうであります。湯浅氏から「地域で活動したいなら、地域で仲間を作った方がいいよ」とアドバイスを受けたようであります。2011年の夏休みの終り頃、プレイパークにきている中学3年生のT君にスーパーでばったり出会ったところ「先生に都立高校は無理だといわれた」「どうして？まだ夏休みなのに、今からいけないなんて決めることないよ」とお節介である栗林氏は自宅に連れていき「うちはここだよ、本当に勉強したいなら教えてあげるから、いつでもおいでよ」と言って別れた5分後、インターホンが鳴り、ドアを開けると「ねえ、本当に勉強教えてくれるの？」とT君が立っていた。それから数日後栗林氏の1F事務所での勉強会が始まる。小学生用の小数点の足し算引き算、掛け算などのドリルをもってきて勉強のやり方、高校進学について誰に聞いていいかわからないことを話してくれたようです。それから毎日、事務所での無料塾が始まったということです。ご飯も一緒に食べたようですが「クリば〜の家は、家族みんなでご飯食べるの？気持ちワルー」というT君と2人で食べているうち彼は母子家庭でお母さんは昼も夜も仕事だということでした。渡された小遣いで、一人で食べていたようでした。T君に1か月ほど寄り添ったが栗林さん1人では抱えきれなくなりプレイパークのボランティア学生4人に「夜ご飯は用意するから協力してほしい」と4人も巻き込みサポートを継続することができたようであります。小学校で躓いているT君とのかかわりで何か感じるところがあり、みんながエンパワーメントすることができたという。2012年6月T君受験報告会のシンポジウムを開催し、参加した地域住民80人に「地域の子どもの地域で見守り支えるため、ゆるやかにつながりたいね」と呼びかけ「豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」が誕生した淵源である。また、2013年T君の学習サポートのおかげで、掛け算の勉強で躓く子、お金の問題で塾や模擬試験を我慢する子がいることを知り、始めたのが公の集会所での無料学習支援WAKUWAKU勉強会である。

また、2013年、わいわいがやがやみんなでご飯を食べる「要町あさやけ子ども食堂」が誕生。これはT君がいつもコンビニでご飯を一人で食べていることを知ったのがきっかけで、もう一つのきっかけになったのはパン屋さんの山田さんが大きい一軒家で奥様がなくなり、息子さん夫妻が引っ越して、山田さんは独り暮らしになったと聞き、栗林さんのお節介が始まる。山田さんは生きる気力をなくしておられたようですが、「みんなでご飯を食べれる子ども食堂をやりたい」と現状から一步踏み出そうと決意された。月2回の子ども食堂の日、山田じいじは、うれしそうにニコニコしているようです。T君と山田さんの声が周囲の人を動かし、原動力になり、ともに暮らせるまちづくりになってきたといわれました。今や子ども食堂、無料学習塾の名前を知らない方はいないと思いますが、お節介こそ本当に助けてあげなければならない方々への最高の支援の源であるをつくづく感じさせられました。米や野菜は欠かしたことがないほど寄付が集まってくるようですが、多くの方がボランティアとして楽しく参加してネットワークを広げている。岡崎市内にもやりたい方がきつっているのではないかと思います。そんな方々のためにも子ども食堂や無料学習塾開設のきっかけとなる講演会など開催する必要性を感じました。

住民主導型でこのようなネットワークができたことは驚きであるが、子どもも孤独から解放され、お世話をする方も生き甲斐を感じる。これほど生きた事業は日本の国の誇りであるとさえ感じる。共感と感動の活動の中で、課題と真剣に向き合う方々がいて自立をして社会で役に立つ人たちがこの環境の中でこそ育つのではないかと大いなる期待をしたい。

また、行政も全国的に動き始めている北九州市、江戸川区、愛媛県などであるが、関係を持つことにより、安定的に支援できる可能性が出てくると思われます。

神奈川県立保健福祉大学／新保幸男教授は次のように見解を述べている。ひとり親家庭の子どもに対し、学習機会や食事を提供する支援の意義は、単に勉強する場、栄養を摂取する場というだけにとどまりません。大学生や近隣のボランティアと同じ場所に集い、交流を重ねることによって、自分を見守っている大人が、親以外にもたくさんいることが伝わり、子どもたちの「心のケア」につながります。

こうした支援の動きが自治体に広がることは、取り組みに対する社会的な信用を高め、実施場所の確保なども容易になります。併せて、行政職員が関わることで、公的支援がより明確となり、「解決すべき課題の発見」も期待できます。

行政や地域の人々が関わりながら、必要な時期に必要な支援を講じることが、子どもの健全育成の手助けとなり、それが“貧困の連鎖”を防ぐと確信しています。

WAKUWAKU ネットワークの考え方のパンフレットに掲載されている理念を最後に紹介しておきたいと思います。

私たちの願いは子どもたちが安心していられる居場所をさまざまなカタチで地域に点在化させていきたい、ということです。

子どもの外遊びの場を保障する「プレーパーク」、経済的貧困に左右されることなく学びの場を保障する「無料学習支援」、孤食が当たり前の子どもが、一家団欒のような暖かさを味わえる「子ども食堂」、親の帰りが遅い子どもたちのための「夜の児童館」、困ったときにいつでも泊まれる「子どもシェルター」などなど。

信頼できる大人や学生につながったとき、一人の子どもの人生が大きく変わる可能性があります。

「地域を変える 子どもが変わる 未来を変える」を合言葉に、豊島子ども WAKUWAKU ネットワークは、特定非営利活動法人として未来を支える子どもたちに広く寄与していこうと考えて行動していきます

<所 感>・・・井手瀬絹子

豊島区 WAKUWAKU ネットワークは地域の不登校、虐待、外国籍、障害等さまざまな困難を抱えた子どもたちを、地域で見守り育てるため、「知っているひとりの子どもの困りごと」から始まり、2012年栗林知絵子氏を代表に100名足らずで設立、1年後にNPO法人に飛躍されました。それは、豊島区がプレーパークの事業拡充に向け、事業委託の意向を示したため、池袋本町プレーパークの会をWAKUWAKUの傘下と位置づけ、2013年にNPOの認証を取得されたのです。同年2月にお金の問題で塾や模擬試験を我慢する子どもがいる

ことを知り、始めたのが公の集会室での無料学習支援池袋 WAKUWAKU 勉強会、にほんご勉強会も同時開催されています。そして、2013 年春、わいわいガヤガヤみんなでご飯を食べる「要町あさやけ子ども食堂」が生まれました。これは、T 君がいつもコンビニのご飯をひとりで食べていることを知ったことと、もう一つ、パン屋の山田さんが大きい 1 軒家でひとりぼっちになってしまったことを知り、山田さんをほっとけなくなり「みんなでご飯食べる子ども食堂をやりたい」と山田さんがつぶやいたことがきっかけとなって実現しています。栗林代表は、「今、あらためて振り返ると、現状から一步踏み出そうと「やってみたい」とつぶやいた T 君と山田さんの声が、周囲を動かし、原動力となり、共に暮らす町をつくることになったのだと思います」と述懐されています。山田さんはその時のことを「代表の栗林さんが「子ども食堂、やってみたい」とつぶやいたことを、栗林代表が聞き逃さず、その場で多くの方の賛同を得て引くに引けに「やりましょう」という事になった」と、この時の山田さんの思いを聞き逃さなかった栗林代表の優しさ、行動力に脱帽です。2015 年度より、池袋本町プレーパークは豊島区より事業委託され、常設となっています。2014 年厚生労働省の発表で、6 人に 1 人の子どもが貧困状況にあることを多くの人を知ることになりました。お金がないことで諦めたりと多くのチャンスと経験を失います。そして、大人になったときにまた、貧困家庭を築いてしまうという貧困の連鎖が生まれてしまいます。栗林代表は「国や市区町村の制度を私たちは変えることはできないけれど、子ども食堂をつくり、まちの人と人がつながり直すことは、地域住民だからできること！行政にはできません。行政のできないことを批判する前に、私たちができることをやってみませんか。」と、また、共に活動されてきた天野氏は「「見学に来た人たちは、議員さんや行政関係者もいらっしやっただが、一番多いのは「子ども食堂をつくりたい」と言ってやってくる市民だった。NPO で活動している人たちもいたが、多くはこれまでそういった活動には無縁で「私に子ども食堂がつくれますか」という方たちだった。共通するのは、困っている子どものために何かしたいという熱い思いだった。これこそが本物のボランティアであろう。仕事ではなくお金になることもなく、主体的に自発的に取り組もうという姿勢である」との言葉に自分を反省するやら襟を正した次第です。私は仕事で伺いましたが、でもそれでも、栗林代表の大きな大きな熱き心に触れて、「子ども食堂」の原点を肌で感じ、学ばせていただいたことは貴重な出会いであり時間となりました。大変多忙の中を丁寧に気持ちよく応対いただき感謝申し上げます。ありがとうございました。

<所 感>・・・畑尻宣長

豊島区の特定非営利活動法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークの取り組みについて学んで参りました。代表者である栗林知絵子さんからお話をお聞きました。一番印象に残ったのは、設立前から意識を持って、“おせっかい”をしていたことです。これは、本市において見渡しても、なかなか見つけることが出来ない人材ではないかと感じました。潜在的にそういう思いを持っていても表に出てこない方が多いように思います。

その中で、当初、栗林さんが我が子を公園で遊ばせていたところ、昨日から何も食べていないという子と出会います。話を聞くと、シングルマザーのお宅で 1 食 500 円を子どもに

渡し、働きに出ているようでした。その子どもは、500円でお菓子を買って、それが夕食ということで過ごしていたそうです。その子から言われた言葉は、「家族でご飯食べてるんだ。気持ち悪い」だったそうです。その子は、家族でご飯を食べるという習慣もなくいつも一人だったそうです。栗林さんは、その子を思い、家に呼んでご飯と一緒に食べさせてあげました。そうこうしているうちに、引っ越しをされて、出会った公園にも来なくなりました。まだ何か、やってあげることが出来たのではないかと、市に繋げることで良くなることがあったのではないかと、思うようになっていったそうです。

別の子で、公園に来る子の中に、見かけは普通の格好で、昔のような貧乏ということがわからない状況の中で、中学3年生の子がいました。「僕は高校へ行きたいがいけない」ということを聞いて、勉強を見てあげることになりました。すると学力は小学校3年生レベルだったそうです。小学校3年生で学習につまづいて、そのまま中学3年生まで来てしまった。その子の両親は離婚して、母親は一生懸命働いている為、何も言えずここまできたということでした。

そのような経験をされた栗林さんは、「地域を変える 子どもが変わる 未来を変える」ということで、いろんなお母さんたちのネットワークを使って支援に乗り出してきました。そこから、子どもの出会いの場でもあるプレーパークを活用し、子ども食堂を数か所展開し、同時に学習支援のみならず、夜の児童館までつくり、子どもたちの受け皿を確保してきたのが、子ども WAKUWAKU ネットワークであります。

地域を変えるのは、大人であり、子どもたちの「たすけて」をキャッチして手を差し伸べていく、大人をつくっていく。また、敏感に察していくように変わらなければいけないと思いました。栗林さんが言われるように、今の時代、見た目では、本当にわからない。だからこそアンテナを張ってキャッチするのが私たちの役目だとも言われていました。また、ホームページには、子ども食堂の作り方が載っています。これも、どんどん、子どもの居場所を増やしていきたい。そんな思いからだと思いました。そういった取り組みを是非、本市でも取り入れ、潜在している子どもの貧困の連鎖を止めていける力があると感じています。それには、私たち大人の意識を変えることから始めないといけません。その第一歩となるよう、議会を通して進めていきたいと思えます。

<所 感>・・・野島さつき

厚生労働省のデータによると、子どもの貧困率は、1985年で10.9%、2014年には16.3%と増加している。生活保護を受けていたり、生活保護とほとんど変わらない年収のワーキングプア家庭で育つ子どもが6人に1人いる状態である。お金がないことにより、ユニホームや道具が必要な部活は諦めなければいけない、塾に行けない、大学に行きたくても行けないなど多くのチャンスを失い、大人になったときにまた、貧困家庭を築いてしまうという貧困の連鎖が生まれてしまう。

NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークは、地域の子どもの地域で見守り育てるため2012年に設立された。キャッチコピーは、「地域を変える 子どもが変わる 未来を変える」この言葉には、どんな子どもであろうとも生まれた時から等しく持つ「未来の可

能性」への思いが込められている。地域の子どもを、地域が見守り、学びや暮らしを有機的に支えるネットワークをつくり、子どもの未来を明るく変えていく。さまざまなカタチの居場所を通じて、信頼できる大人や若者につながったとき、一人の子どもの人生が大きく変わる可能性があると感じ、活動をしているという。「遊びサポート」の池袋本町プレーパーク、「学びサポート」の無料学習支援、「暮らしサポート」の子ども食堂、それぞれの居場所で地域の子どもが地域の大人と出会い信頼関係を築き、活動の中で子どもたちが何気なくもらった言葉をキャッチして、必要な支援につなげている。

今、子ども食堂は全国的に広がり 300 カ所以上に増えている。場所もお寺や一人暮らしのおばあちゃんの家、レストランの定休日に開催しているところもある。また、高齢者のデイサービスの通所施設は午後 4 時頃に終わるので、夜に利用しているところもある。児童館で始めたところもあり、行政と民間が協働して設立する取り組みも始まっているという。子ども食堂の成果は参加人数では測れない。数十年後に子どもが自立し、未来を変えていくことが成果だという。未来への投資だけでなく、まちづくりや多世代共生、食育、女性活躍推進などの観点からもその成果は計り知れない。「人間は語り合うことを欲している動物で、居場所を必要としている。子ども食堂は居場所づくりで、支援する側される側に分かれることなく、そこに集うすべての人がカタチづくるものだ」と事務局長の天野敬子さんは言われている。

豊島区などの都会ではNPO法人や民間等、子ども食堂を立ち上げる団体も増え、今では行政がパンフレットを作成し、問い合わせの窓口を担っている。岡崎市では、子ども食堂はまだこれからの取り組みだが、現在行われている学習支援とのタイアップはできないだろうか。子どもの貧困問題は、放っておく訳にはいかない。何ができるのか、各地の取り組みを参考に検討して参りたい。